グローバリズムの指針

２０２５年１２月 29 日

　世界は、いまだに制御の利かないグローバリズムの中にある。そして、いろいろな立場の人たちによって、様々な局面からその弊害が議論されている。しかし有効な対策はまだ見出されていない。そのような中にあって、現在の日本の政府が打ち出す矢継ぎ早の政策が、注目されている。高市総理の毅然とした倫理的立ち位置、片山財務大臣の揺るがない政治道徳、そして小野田経済安全保障担当大臣の厳格な、不法移民対策が打ち出されている。最近は特に、不法滞在外国人と、彼らによる違法な活動に対する、AI による電光石火の調査と、迅速な対策が執行されている。今回は特に、小野田大臣の非常に厳格な対応と、その中に潜んでいる強い倫理性、あるいは憐憫の情とでもいうべき、人間性に着目して語りたい。

　小野田大臣は、政治家としてはまだ若く、経験も深くはない。決然と立つ高市総理や、非常に深い経験と高い知識を持つ、片山財務大臣の後ろ盾があって、その能力を最大限に・・・多分最大限以上の活躍を許されているように見える。強力な後ろ盾がない限り不可能なことを、次々とやり遂げてきた。まさに、現代日本政治に現れた、三大女傑の一人である。

　彼女は、常に日本という国家を最初に考えて行動している。国家を守り、国民に最大の幸せを獲得してもらうのが、政治の使命であると感じているように見える。だから、日本に害を及ぼす法律や慣習には我慢がならず、特に、国民から幸せを奪い取ろうとするような、外国からの様々な干渉を許すことができない。善かれ悪しかれグローバリズムが日本をも覆い、様々な脅威をもたらしているのは事実である。国境を越えた人間の動き、情報の伝達、経済的影響、軍事的脅威、そしてパンデミック。

　なかでも、日本に大きな脅威となっているのは、グローバルに広がる、中国共産党政権の覇権主義的活動である。軍事的な脅威もあれば経済的脅威もある。そして、この両方が絡む、移民問題、観光旅行者問題、ビザの問題、留学生問題、土地の買い占め問題、不法な生活保護受給者、緩やかな医療制度の虚をついた盗用などが、著しく日本社会を混乱させ、困惑させている。国民が納める税金の莫大な額が、何十年にもわたって中国人のために用いられ、日本の生活困窮者たちは見過ごしにされてきた。しかも中国人は税金を免除されてきた。

　それだけではなく、つい最近できた新しい法律によれば、すべての中国人は中国共産党政権の指示に、絶対に服従しなければならない。これは国内に住む中国人にも、国外に住む中国人にも適用される。この無茶な法律によって、中国人の脅威は増々強大化してる。しかも、その法律の拘束力は非常に強い。国内では個人であっても企業のような団体であっても、必ず共産党の命令に従って活動しなければならないし、それに反した者は厳罰に

処せられる。実際数多くの者が処罰され、命さえ失っている。

　国外に出た者も安心はできない。中国共産党は、あらゆる国に彼らの警察組織を、秘密裏に送っている。共産党の命令に従わない者、反中国共産党活動を行っている者は、密かに捕らえて中国に連れ帰り、そこで裁判をすることができるのである。それだけでなく、たとえば、日本人が自国で反中国共産党活動を続け、それが彼らの目に余るならば、彼らはその日本人を捕らえ、秘密裏に中国に連れて行き、彼らの裁判にかけることができる。そんな法律を作り上げているのである。この法律が、日本人に対して執行されたという話は、まだ聞いたことがない。ろうと思えば、北朝鮮がやったように、日本人を拉致して自国に連れていくくらい、朝飯前である。でも、外国でそのまま密かに、死刑を執行された、文字通り消されたという話は、どこかで聞いたことがある。

　すべての中国人が、この法律に拘束されている。それが非常に危険な状況を作り出している。中国から来ている人たちは、共産党が送り出している学術研究員であっても、政治的要員であっても、単なる旅行者であっても、経済活動をする者であっても、留学生であっても、技術者であっても、すべて中国共産党の指示によって、中国共産党のために活動しなければならないのである。つまり、すべての中国人は、否応なしに、中国共産党のスパイになる義務を負わされている。もし彼らが中国共産党の指示に従わなければ、彼ら自身が非常に危険な目に遭うだけではなく、国に残して来た、家族親戚が人質としてされているのである。こうして、まさに中国人による無法な活動が、野放しになってきた。

　例えば水源地を含む山林の買い占め、自衛隊の基地周辺や、日本国の重要な施設の周りの土地の買い占め、地元の役所も住民も知らない間に建てられる、中国人旅行者や滞在者のための違法施設、新疆ウイグルの人々の強制労働によって生産されている、ソーラーエネルギーパネル問題。どれ一つを取っても、ゆるがせにできない。ところが日本の法律は、本来性善説を前提に造られている。間違いや失敗や悪意の犯罪も沢山あるが、人間は本来善き者であるという楽観的性善説が、法律設定の大前提である。だから、現在のグローバリズムの勢いに乗って、大量に訪れてくる外国人の無法な行動に対して、なんの法律もない。対応できないのである。

　例えば日本には、反スパイ法という法律さえない。まるで、国家ではないみたいだと言われれば、その通りである。本当のところ、日本はスパイ天国として有名である。旧ソ連、あるいは、今のロシアのスパイ活動は、幾度も日本社会に激しい動揺を巻き起こしてきた。様々な国の色々なスパイが、なんの制限もないまま、日常的に活動している。スパイだとわかっていても、日本にはスパイ防止法がないために、逮捕も取り締まりもできない。現在、中国のスパイが、日本のあるゆるところで活動していることは、誰もが知る事実である。

　ところが、スパイを取り締る法的根拠を持たない政府は、これをどうすることもできない。日本の〇〇外務大臣はスパイ活動をしている、あるいは日中友好協会も怪しい活動をしていると、アメリカの政府機関から警告を受けていても、私たちの政府はそれを無視してきた。政府の中に、政治家の中にさえ、スパイまがいの人物たちがかなりいるのである。

しばらく前の総理大臣の中には、自分が中国を訪れた時に、ハニートラップに掛かってしまったと、認めた者もいたほどである。金で買われた政治家たちもいるに違いない。

現高市政権は、スパイを取り締まる法律を作りたい意向のようであるが、これには反対勢力もあって、すぐには実行できない。その間にも、産業スパイは日本のあらゆる新技術、発明を盗んで行く。国家の機密事項が筒抜けにされ、日本は軍事的にも危険な状態に陥っていくことが、目に見えている。そのような中に、突然、英断をもって活動しだしたのが小野田大臣である。彼女はスパイ防止法を待つことなく、現行法の中で、外国人の不法滞在者と不法な活動をしている者を取り締まることにした。

彼女の政治活動が、中国との軋轢を増すことになるという、親中派の人々の強い反対もあったが、彼女はそれに臆することはなかった。不法な滞在、不法な経済活動、不法な不動産取得や金銭の動き、さらには背後の中国共産党の活動などを、AI をもって洗い出し、取り締まることにした。不法を行っている者たちに対し、たちまち帰国命令を出し、僅か 72 時間の猶予しか与えなかった。その結果、日本に滞在する中国人の数は、劇的に減少し、多くの都市にある中華街には、蜘蛛の巣が張っている。

これに対し中国共産党政権は激しく怒り、厳しい言葉の抗議を公にし、世界に訴えたが、小野田大臣は、あくまでも公正な法律の適用であり、法律にのっとって滞在し、法律にのっとって生活している人たちは、中国人であろうとその他の外国人であろうと、何ら差別することなく歓迎されるという趣旨のことを、繰り返し語っている。許されないのは、法律に反して日本に入国し、法に反したことをしながら、日本で生活している人たちであって、外国人差別には当たらないと説明している。

彼女は差別や敵愾心をもって政治を行うのではなく、あくまでも法をもって政治を行うのだと述べている。しかし彼女はそこで止まらない。この法を執行するとき、知らない間に法を犯していた外国人、あるいは騙されて法を犯すようになってしまった外国人、強制されてそうなった人たちもいるに違いない。その他、この政策の実施によって、あまりにも惨めな状態に突き落とされる、外国人たちもいるのを想定して、彼らへの特別な配慮も、検討している。たとえ犯罪者であっても、人間である。人間らしく、人間の尊厳を大切に取り扱われなければならないと、対策を考えているとのことである。彼女は冷酷な法の執行者ではない。苦境に陥った人たちの傷み、苦しみ、悲しみに、共感をもって法を執行するのである。哀れみと共感をもって寄り添おうとしている。それが、世界中の心ある人たちの関心を集めている。厳しい対処の中にある、情、人間性である。

小野田大臣は、父がアメリカ人、母が日本人という家庭に生まれたが、その国際結婚は必ずしも幸福なものではなかったようである。彼女自身は幼少期から日本で育ち、英語もネイティブではない。しかし、日本の女性としては背が高く、物怖じせず自分の言葉で語る姿勢は印象的である。理念としての国際性ではなく、片親の混血児として、幼い時から一所懸命に生きてきた人間としての、重い経験を背負った政治家である。それが彼女の発

言や政治手法に現れているように思われる。彼女自身が、そのような意味のことを、語っていたことがあった。

私は、小野田大臣がクリスチャンであるとは聞いたことがない。彼女の後ろ盾になっている二人の女性も、クリスチャンではない。しかし彼女は、クリスチャン以上のことをやっている。クリスチャン以上の高潔な精神で、政治を行おうとしている。どこの国の人であろうと、人間を差別したり、理由なく排斥したりすることはない。彼女は、あくまでも公平に法を執行しようとしている。しかもその法の執行のために、必ず、苦しみ傷み、人間性までも傷つけられてしまう人たちも、出てくるに違いないと考えて、そのための対処も考えている。

今や世界中の人々が、彼女の政治手法に注目しているようである。世界の主要なメディアが、彼女のことを取り上げている。そしてこれこそが、これからの世界の模範である。グローバリズムの新しい指針、方向性だと考え始めている。私は彼女の純真さが失われないように、いつまでも保たれるように願っている。たしかに、彼女の中にあるのはキリスト教の倫理ではない。キリスト教の教えではない。しかし、それは聖書の教えである。彼女自身も、多くのクリスチャンも気付いていないだろう。しかしこれこそが、神の姿に似せて造られた人間性、本源的人間性の現れである。クリスチャン国家ではない日本の、日本人らしい姿である。そしてそれは、キリスト教の教えとは馴染まないが、キリストの教えと生きざまには見事に調和する。

私は今、新渡戸稲造のことを思い出す。彼は札幌農学校でクリスチャンとなったが、アメリカ留学中に伝統的キリスト教に失望し、クエーカーと呼ばれる小さな良心的キリスト教に加わった。その後彼は様々な要職を経て、国際連盟で副会長として活躍したが、パリ国際会議で、歴史上はじめて、人種差別廃止の提案をした。ところが、過半数の賛同を得たにもかかわらず、残念ながら、議長を務めたアメリカ大統領によって、廃案にされてしまった。しかし彼の反伝統的キリスト教精神は、力強く生き続けた。新渡戸稲造が従ったのは、伝統的キリスト教の教えではない。小野田大臣と同じく、自分の中にある本能的人間性、神に似せて造られた本源的人間性に従ったのだと思う。

あと数か月の命と言われている私は、小野田大臣の中に、まことに良いものを見せていただいて喜んでいる。今の私は、せめて、彼女の一途で、けなげな精神のために祈ろう。